



奈良女子大学 教育システム研究開発センター

Nara Women's University

Newsletter 05

「批判的友情」?

教育システム研究開発センター員 西村 拓生 (文学部助教授)

私は昨年、英国のケンブリッジ大学で在外研究をする機会に恵まれました。そこでは本学のこれからの教育研究に参考になりそうなことを、いろいろ見聞し、学ぶことができました。これも、その中の一つです。

私の受け入れ教官は教育学部の John MacBeath 教授。本学の杉峰英憲教授の共同研究者というご縁です。ケンブリッジには教育関連の組織として教育学部、教育研究所、そして教員養成の伝統をもつホマートン・カレッジがあったのですが、私が行ったのは、その三つが統合して新しい瀟洒な建物に移転した直後でした。MacBeath 教授は英国におけるリーダーシップ論の権威で、主宰する講座の名称も “Leadership for Learning” というもの。学校改革のためのストラテジーやそのための教師のあり方が研究の主題でした。私は同講座の Reader (日本では言えば助教授) の Sue Swaffield さんのゼミに参加させてもらいました。このゼミは、主として現職の教員が修士号を取得するためのコースの一環で、ほぼ隔週の水曜、午後いっぱいかけて講義や議論や論文指導が行われていました。およそ20人の学生のうち半数が小学校、残りが中学校その他の教師で、日本では言えば教頭や主任に相当する、比較的ベテランの層が中心。このゼミの内容や実施体制も、本学が今後、リカレント教育に本気で取り組むのであれば参考になりそうなことがいろいろありましたが、ここで書きたいのは、担当の Sue さんの研究についてです。

彼女の研究のキーワードは “Critical Friendship” というものでした。「批判的友情」とでも訳しましょうか。「物事を新しい光のもとで見ると手助けとなる問いかけをしてくれる」、「思考を刺激し、新しい考えをもたらしてくれる」、「あなたの仕事から少し離れて、それを理解してくれる」、「少し離れた、新鮮な視点を与えてくれる」、「あなたとその仕事に心から関心をもち、けれども過度に挑戦的にならない」、「あなたを励まし、確信を与えてくれる」、「あなたが進むべき道筋を維持しつつ、時には新しい方向性を試して最初の期待を上回るための手助けをしてくれる」、「そこで働く人々とその成果に配慮しつつ、仕事の道筋

を原理的に明らかにしてくれる」—こんな役割を果たしてくれるのが、彼女の言う「批判的友人」です。

「批判的友人」は、公的に評価する権限は持たない点で「指導・監督」する立場 (たとえば教育委員会) とは異なります。「カウンセラー」の立場とは似ていますが、前者の関心が個人的で心理的な問題に焦点化されているのに対して、「批判的友人」は、個々の教師だけでなく、その集団としての組織のあり方や成果が関心事です。「コーチ」とも似ていますが、「コーチ」は往々にして指示的であるのに対し、「批判的友人」の姿勢は、より助成的です。「コンサルタント」の立場とは、前者が限定された課題について比較的短期的な達成を、ビジネスとして請け負うのに対して、「批判的友人」は価値観の共有に基づいて、長期的で根本的な変化の過程にかかわろうとする点で異なります。

この「批判的友人」というポジションを学校改革の組織・過程に明確に位置づけ、改革を促進しつつ、その役割をさらに明らかにするのが Sue さんの研究です。組織の活動が成功するときには、必ずそのような存在が機能しているのだそうです。彼女の話聞きながら私がすぐに想起したのは、他ならぬ教育システム研究開発センターのことでした。「批判的友情」というのは、私たちの大学と附属校園がセンターを媒介として目指している関係にピッタリではないか、と。「批判」という言葉は、日常的にはしばしば単に否定的ニュアンスで使われますが、ここでの意味は違います。ある事柄を、冷静な距離を保って根本的に吟味し直すこと、というほどの意味です。

関心や目標を共有しつつ、少し離れた距離から自分の仕事を吟味し直す、新鮮な視点を与えてくれる存在に、お互いなること。—全学附属化の改組とセンター立ち上げの過程で、私たちはそのような関係を徐々に作り上げてこられたと自負しています。しかし、「冷たい他人」でもなく「甘い身内」でもないことは、なかなか難しいことです。私たちは互いに、充分かつ適度に「批判的」な「友人」たり得ているでしょうか。私たちの試みも、まだ始まったばかりです。

附属学校園の「研究開発学校」への理論的支援

本センターでは本年度の活動のひとつとして本学附属学校園に指定された「研究開発学校」の研究における理論的基盤の支援を行っています。附属学校園は3校園の合同で「幼・小・中等15年間にわたり、事物認識とその表現形成の徹底化を通して、独創的で「ねばり強い」思考能力を育成する教育課程の開発」の課題で平成18年度から平成20年度までの3年間、文部科学省の研究開発学校の指定を受けました。本研究は「もの」から「こと」へ至る子どもの事物認識の発達を3歳から18歳までのスパンで捉え、方法的には「探るー見るー表す」を軸にした活動の中で子どもの粘り強い思考力と表現力を形成するカリキュラムの研究開発を行うというものです (fig. 1)。この領域はいわゆる「総合的な学習」にあたりますが、本学附属学校園は附属幼稚園の伝統的な自由保育、附属小学校の「奈良の学習法」、附属中等教育学校の「世界学」「環境学」など、総合的な学習においては常に先駆的取り組みを発信してきました。世間では「総合的な

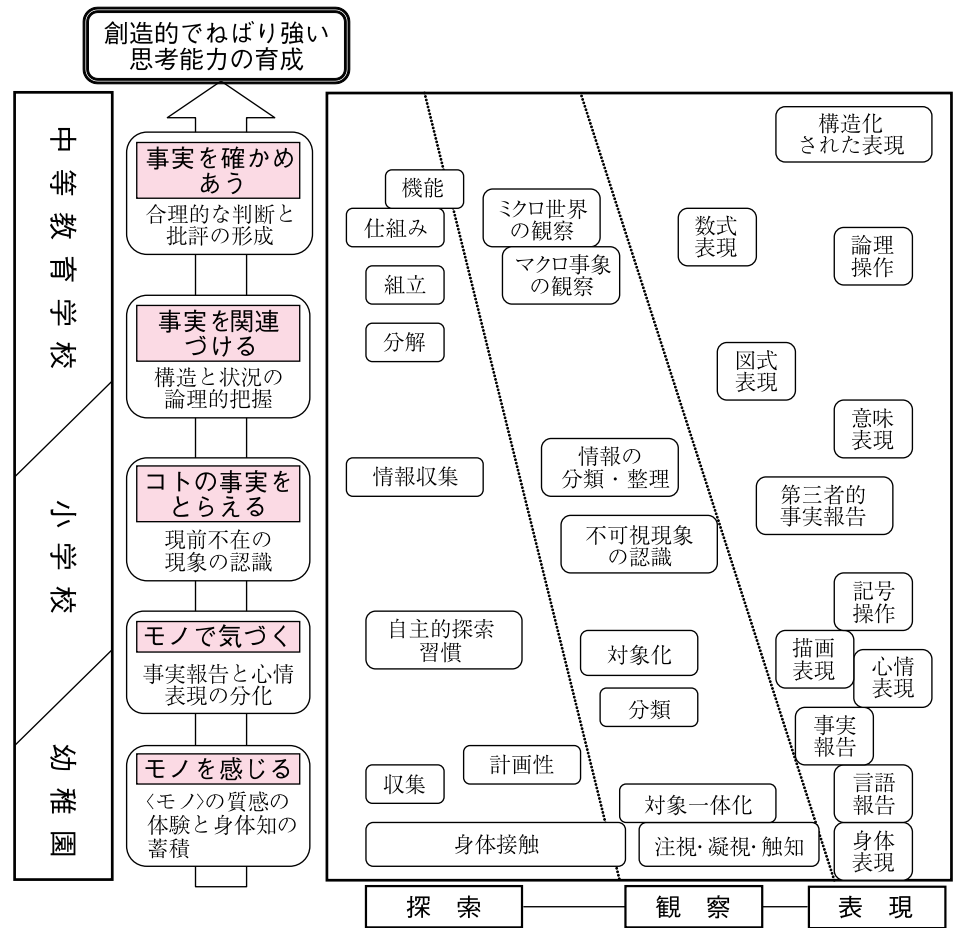


fig1. 15年間の事物探究活動で育つ事物認識とその表現形成 (仮説)

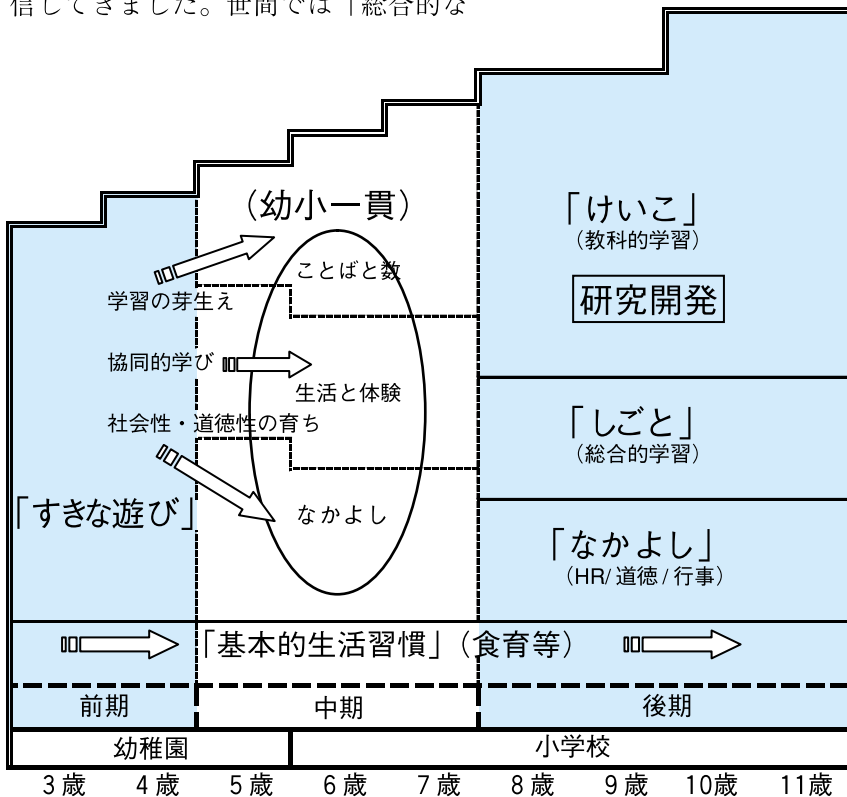


fig2. 幼小一貫の教育システム構想

学習」についての論議が様々ありますが、この情勢の中、本研究開発は「総合的な学習」の見直しと復権を提示する画期的で意欲的なものといえます。センターではこの研究において子どもの認識発達の仮説モデルを提示し、このモデルに基づいた基礎的な部分での研究方法、視点などを附属学校園に提案してきました。研究の中では、子どもの発達における4歳児と5歳児間のアーティキュレーションなどが徐々に明確になっています。また、このことは附属学校部が主体になって取り組んでいる幼小一貫の教育システム構想にも示唆を与えています (fig. 2)。その他、本研究の基盤的内容である子どもの「学習スタイル質問紙調査」において、質問項目の提示、分析方法の統計的手法の指導などで、学校現場だけの研究では、直観的な質問項目の度数分布「印象批評」の域からなかなか脱せられなかった同領域における新たな地平の開拓にも、貢献しています。

(文責 荒木由弥)

附属小学校 平成18年度 学習研究集会

今回の研究集会では、2003年度に刊行した著書『学習力』を育てる秘訣』をもとに研究主題を「確かな力を培う学習法」とし、「奈良の学習法」で培われる「確かな力」とはどういうものなのか、子どもたちの確かな力をどのように育てていけばよいかを、特に、「学習力を育てるすじ道」に焦点を当てて、考え合った。

期日：2006年6月9日（金）

主題：確かな力を培う学習法

一学習力を育てるすじ道一

内容：朝の会、公開学習①②、公開学習①②の協議会、分科会

当日の参加者は、376名であった。

■ 朝の会

全学級が公開した。歌、元気調べ、自由研究の発表等、各学級の特色ある朝の会であった。

■ 公開学習

「しごと」「けいこ」「なかよし」の学習を2コマに分けて公開した。

■ 分科会

本校には、伝統的な学習法の指針ともなるべき「各種能力の指導系統表」（平成6年度に作成）がある。この指導系統表を再度見直しつつ検討を加え、新しい時代の学習指導に見合ったものとして「学習力を育てるすじ道」

を作成しつつある。

そのために分科会の構成を能力別の領域に分けて協議した。



言語的領域「学び合う子どもを育てるすじ道」

社会的領域「社会的事象の意味にせまるすじ道」

数理的領域「短いスパンでも育つ数理の学習力」

科学的領域「生物領域の学習力を育てるすじ道」

芸術的領域「子どもの創造力と表現力」

体育的領域「体育領域における学習力を育てるすじ道」

家庭生活的領域「家庭科的能力を育てるすじ道」

お茶の水女子大学との共催による第4回 大学一附属連携フォーラム

テーマ「子どもたちの公共性を育む授業づくり・学校づくり」

■ 2006年6月24日（土）14時～17時

■ お茶の水女子大学 本館306室

■ プログラム

基調講演 宮本みち子（放送大学）

「青少年・若者の社会参画を進める取り組み～EUを例にして～」

話題提供

谷本 直美（東京学芸大学附属竹早小）

谷岡 義高（奈良女子大学附属小）

長谷川康男（筑波大学附属小）

岡田 泰孝（お茶の水女子大学附属小）

コメンテーター

村野 光則（お茶の水女子大学附属高）

本田 由紀（東京大学社会科学研究所）

足立 文諸（経済産業省）

総括 小玉 重夫（お茶の水女子大学）

「新しいシティズンシップ教育へ向けての課題」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

本学の教育システム研究開発センターとお茶の水女子大学子ども発達教育研究センターの共催による大学一附

属連携フォーラムも今年で第4回となり、今年度は表記のようなプログラムでお茶の水女子大学において開催された。奈良女子大学からは、附属小の谷岡が『しごと』で育つ自律的学習力～奈良は国のまほろば～』というテーマで報告した。奈良という風土に育つ子どもたちの6年間のしごと学習について報告し、日本の子どもに必要な公共性とは、歴史と文化に裏付けられた自律した心を育てることであると伝えた。東京での教育の動向と合っているか少し不安が残ったが、奈良の教育の一端を伝えられたと考えている。（文責 谷岡義高）



今年度の「リベラル・エデュケーション」プロジェクトについて

教育システム研究開発センター員 鮫島 京一（中等教育学校教諭）

私たちは、メディアリテラシーという言葉キーワードに、現代における「教養」教育のあり方を具体的に追究する共同研究を進めている。センター員の西村・鮫島を中心に、附属中等教育学校の二田・吉田隆・長谷教諭の協力を得ながら、研究活動をすすめている。今年の具体的な取り組みとしては、大きく三つある。

第一に、メディアリテラシーという観点から各人の教育実践を検証する作業である。それぞれの専門分野あるいは問題関心を最大限に生かしながら、共同研究のキーワードであるメディアリテラシーについて、明確にしていく作業である。詳細は割愛するが、二田、吉田隆、鮫島の3名は、こうした視点に基づいた研究を行い、各人が所属する学会にて研究報告を行っている。

第二に、中等教育学校5年生選択科目（社会科公民分野）「文化と社会」における、読売テレビとの連携に基づいたカリキュラムづくり、およびその実践である。この研究をすすめていくために、中等教育学校の4名は、夏休みを利用して同社にて研修を行った。その経験をもとに鮫島と長谷は、10月から読売テレビと協力し、映像ドキュメンタリー作品をつくるカリキュラムを実施中である（来年度3月）。



第三に、公開対談の開催である。『「心の教育」を問い直す』をテーマとする公開対談を、西村・鮫島で企画し、10月21日に開催された中等教育学校公開研究会にて行った。対談者は、中島浩籌氏（法政大学講師）、春日井敏之氏（立命館大学文学部教授）、鮫島の3名、司会を西村がつとめた。参加者は約200名であった。ここでは、メディアリテラシーということよりもむしろ、教員に必要とされる基層的リテラシーのあり方を問いかけることに焦点をしばった。対談という形態によって、問題状況をできるだけつまびらかにし、参加者各人の実践に資するよう努めた。こうした努力が実り、参加者から好意的に評価されることとなった。本研究プロジェクトの社会的還元の間をつくることができたと考える。



以上が、今年の活動の主要な内容である。これ以外にも報告すべき活動はある。たとえば、吉田隆は、中等教育学校にて「情報モラル」をキーワードとする研修会を実施している。単発的に行うのではなく、年度を通じて実施しているところに特徴がある。西村は、鮫島の6年「倫理」にて、「情報化社会における言葉の役割」をテーマとする公開授業に参加するだけでなく、研究協議において、メディアリテラシーが切り開く地平を学校教育が抱え込んでいる問題点と結びつける理論的視点を示している。さらに、二田は、立命館大学より学生インターシップを受け入れ、メディアリテラシーの観点に基づく授業のあり方を実践的に学ぶ機会を教員志望の学生に提供している。こうしたことにも現れているように、このプロジェクトは、センターのプロジェクトの枠にとどまらず、新しい教育のあり方をめざす具体的な「運動」として、さまざまな場に波及しているといえよう。大学連携に基づく共同研究のモデルを示していると考えられる。

課題となっていることは二つである。一つは、財政的な問題である。今年度のこのプロジェクトに関する予算は中等教育学校の予算で行っている。「予算と実働部隊は中等教育学校で、成果はセンターで」では、連携の形としては不十分であろう。第二に、本学における他のプロジェクトとの連携である。たとえば「子ども学プロジェクト」との連携を考えていくことも可能ではないだろうか（もちろん、安易な連携は避けなければならないが）。大学における各研究プロジェクトとの情報交換をすすめるところからはじめたいと考える。

奈良女子大学教育システム研究開発センター Newsletter 05
2006年11月発行
奈良女子大学教育システム研究開発センター
〒630-8506 奈良市北魚屋西町
奈良女子大学 H棟505 TEL. 0742-20-3352
Web <http://www.crades.nara-wu.ac.jp/>
mail crades@cc.nara-wu.ac.jp